

ISSN 2186 – 3989

道德教育における宗教的情操

— 『善の研究』における宗教と道德の関係性から —

東風 安生

Religious sentiment in moral education

— The relationship between religion and morality in “zen’no kenkyū” —

Yasuo Kochi

北 陸 大 学 紀 要
第47号(2019年9月)抜刷

道徳教育における宗教的情操

— 『善の研究』における宗教と道徳の関係性から —

東風 安生*

Religious sentiment in moral education

— The relationship between religion and morality in “zen’no kenkyū” —

Yasuo Kochi*

Received April 26, 2019

Accepted May 17, 2019

Abstract

We were able to clarify the relationship between us and God, beginning with pure experience in Nishida's philosophy. It was able to make it clear from the relation between ethics which was a part of the philosophy and the religion by enhancing the philosophical dimension even if it was not urged from the aspect of the religious education to connect morality and the religious sentiment based on the base layer such as absolute nothingness and the place theory of Nishida philosophy.

はじめに

拙著『寛容を基盤においた生命尊重に関する研究』¹において、筆者は宗教教育に関して法律上の規制がある中で、日本での宗教的情操の教育には特段の配慮が必要であると述べた。また、学校教育においては道徳教育によって道徳的情操を培う教育という形で宗教的情操の教育を推進すべきだと主張した。

宗教に対して寛容な姿勢を示す国民性を示す日本において、多様な宗教の信仰を認めている。海外では無宗教だと言うと自分自身の生きる信念をもっていないように思われたと経験を語る留学生も多い。しかし、サッカーワールドカップでの日本人観衆のマナーや東日本大震災で被災した人々の生きる姿から、宗教を信仰していなくても日本人はその行動で宗教的情操をもっていると示していると言えよう。この情操が評価されるのは、日本の道徳教育によって児童生徒の心にこうした教育が施されたからなのであろうか。宗教的情操を道徳的情操として指導することが、日本の背景や将来を考える場合に必要であると上記の論文で結論づけた。だが筆者としては、そもそも宗教的情操について哲学的な形而上の学問でどのように位置づけられているのか、それをどのように倫理学へと舵をきり、さらには、道徳としてとらえ道徳教育の内容としたのが未だに不明な点だと感じている。

*経済経営学部 Faculty of Economics and Management

第1章 研究の目的とその方法

1 研究の目的

学習指導要領の解説・道徳編には、道徳教育の内容項目（教えるべき道徳に関する内容）が、自分自身に関すること、人との関わりに関すること、集団や社会との関わりに関すること、生命や自然、崇高なものとの関わりに関することの順に示されている。そこには、主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関することとして、「感動・畏敬の念」という項目がある。義務教育における児童生徒に対して、以下のような徳目を指導することとしている。小学校5・6年生においては、「美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと」としている。また、中学校の3年間においては、より高度な価値となり、「美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」としている。

義務教育の段階で、日本の教育では「人間の力を超えたもの」に対して畏敬の念を持ち、深めていくことを求めている。これがある人は宗教を文部科学省はすべての国民に教えようとしているのではないかという疑問を投げている。

これまで1958年以降、特設道徳がはじまってからの日本において「畏敬の念」についてはタブー視され、誰もがその内容について深くは言及してこなかった部分の解明に挑みたい。つまりは、「人間の力を超えたものに対して、畏敬の念を深めること」は、宗教を教えることなのか。なぜ、道徳において日本では宗教との関わりが含まれてしまうのか。宗教的情操の教育を肯定的にとらえる論理が確立できることで解決できるのではないかと考える。

この点が明らかになることで、道徳が教科化された2018年に、学校現場において教師がどのようにこの価値を児童生徒に指導していくかわかりやすくなり、「感動・畏敬の念」の内容項目が、未履修で1年間に一度も道徳科の授業で触れることがなかったということのないようにしてほしいと考えている。

2 研究の方法

これまで道徳教育に影響を与えた学問は、心理学系と哲学系の2つであった。しかし、もともと心理学は哲学から分化した学問であり、目に見えぬ心の働きを論理的に解明するか、実験的に解明するか、基本的な研究の対象は心の部分が大きい。そのため、心に関してモラル（倫理学）の面でも、心理学や哲学が影響を与えていた。当事者であろうところの倫理学は、道徳が学校教育の領域として扱われる際に、当時の学者の中での論戦²が起こり、結局は倫理学と道徳は袂を分かつことになった。そのために、日本倫理学会と日本道徳教育学会は別々の道を歩むことになっている。

今回は、日本で最初の世界的な哲学者であり、西田哲学として世界的に評価の高い、西田幾多郎の哲学的思想を分析することにより、解明していこうと考える。石川県の大学に籍を置く者として、西田哲学を道徳教育の課題解決に向けて活用することは、本望であり、義務である。『善の研究』は西田の処女作であるが、この作品を読みながら西田哲学に触れる読書会（寸心読書会）が毎月、かほく市にある西田哲学記念館で開催されている。この催しに参加して、西田哲学への関心を高め、一方で西田哲学についてさらに詳しく学ぶことができる哲学講座が同記念館で年間10回開催されている。2018年度は、4月～3月までこうした西田哲学に対する学びの期間と位置付け、道徳教育への応用を期待していたとこ

ろである。1年間の学びを終えて、いまあらためて道徳と哲学の関係性から、道徳教育における畏敬の念をどのように指導するかという課題に迫っていこうと考える。

第2章 宗教的情操とは何か — 先行研究からふりかえる —

1 宗教教育から

学校教育において、宗教的情操とはどこで関連性をもつのだろうか。「はじめに」で触れたように、日本における宗教教育は決して国民が統一した見解をもっているわけではない。しかし、一般的には宗教教育には3つの柱³があると言われている。

高等学校における公民や倫理で指導しているのが宗教知識教育である。これは、世界3大宗教はキリスト教・イスラム教・仏教ということや、世界最大の宗教はイスラム教で既婚の女性は外出する際にブルカ(スカーフの一種)を被るとか、1日に数回の礼拝があるといった、グローバル化の時代に知らなくてはコミュニケーションをとることができない。

次に、最も公教育において注意しなければならないのが、宗派教育である。日本は信教の自由を憲法で保証し国教といったものを定めていない。仏教でも神道でもない。また、仏教の中の各宗派の教えを詳しく比較しながら教えることもない。一般的に日本史の流れの中で、僧侶や中国の文化の伝来、武士の時代の禅宗などと関連づけての説明はあるが、それぞれの宗派について比較したり、宗教と政治の関係を説明したりする話はない。

最後に最も課題となるのが、宗教的情操の教育である。宗教的情操自体は、宗派教育とも宗教的知識教育とも異なる。宗教に関する知識を教育によって豊かにすることが中心ではない。また、宗派教育によって入信しているその派の信者を増やすための勧誘に用いられるようなものでもない。情操の教育という意味⁴は、道徳的、芸術的、宗教的などの社会的価値をもった高次な感情ないし意志を養うための教育である。つまりは、高い次元で社会的に認められている感情とか意志をより高く養っていくために行われる教育活動である。だから、宗教的情操の教育とは道徳的情操教育や芸術的情操教育と並行して行われる人間の心の情や志といった感性の教育のひとつである。

この宗教的情操の教育が、日本国憲法の信教の自由に抵触して、公立学校という公の学校で指導していることが認められないという考え方⁵がある。確かにこうした感情を培うための教育を実践しようとしたら、宗派教育的に「神の言うことを崇めなさい」などと説教を受けて初めて宗教的な気持ちが発生してくるからかもしれない。実際に私立の小中学校では、道徳科の代わりに宗教が教科として認められて教育課程を編成している学校がある。これらの学校の多くが、建学の精神において宗教者によってその学校の創立理念には宗教が関係している。東京都内にある54校の私立小学校のうち約半分の26校が何らかの宗教を建学の精神に据えている。

しかし一方で宗教的情操自体は、誰もの心に沸き起こるものであり、これをとめることもできないとする意見⁶も否定できない。人は誰もが弱い存在であり、困ったり不安になったりしたとき、神にすがったり神を崇めたりするという考え方である。だからこそ、こうした考え方を大切にする教育は、公の教育で実施することになんら弱気にならずに堂々と指導すればよいという意見もある。さらには、宗教的情操の教育に関わって、そこに必ず畏敬の念の対象となるものが何なのかという課題が生まれる。これが明らかに、神や仏だとした場合には特定の宗教に関して宗派教育を実施していることにつながってしまう。また、宗教の対象となる対象者が、具体的に何を指すのか。キリスト教やイスラム教では神そのものを偶像化できない。そこで預言者としてマホメットやイエス・キリストの立場

を借りる。日本においても、仏様は何種類もあり宗派によっても異なり、大きさも様々である。さらに、神道を具体的に見てはいけないものであり、その瞬間には首をさげなければならぬ。大なるもの（サムシング・グレート）⁷と位置付けた対象にしてよいのか。

2 道徳教育から

改正教育基本法（2006年）では、第21条に教育の目標を次のように規定している。「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養う」として、知徳体の3つの教育の大切さを再確認している。特に徳育の部分では、「豊かな情操と道徳心を培う」としている。

徳育がそのままイコール道徳心を培うのではなく、徳育の中にはもうひとつ、豊かな情操を培うことが挙げられている。教育基本法の文言からはこのように読み取れるが、現実の学校現場では、「宗教教育」の実践は主に中学校から高等学校における中等教育による役割が大きいと考える。ところが、徳育に関して道徳心を養う教育は道徳教育として今や就学前の認定こども園などでも盛んに道徳教育の導入が行われ始めている。また、道徳教育については、小中学校で「特別の教科 道徳」として教科化されている。さらに高等学校においても道徳教育が特別活動や総合的な探究の時間を用いて実践さえ始めている。

さらに、豊かな情操の教育については、道徳科の時間をはじめ、芸術科目（音楽科、美術科等）で実践されており、学校行事における音楽会や学習発表会における舞台発表もこうした情操を豊かにする教育であると言える。

総括してみれば、道徳教育においては豊かな情操を培う教育の中でも、道徳的情操を養う教育が実践されている。しかし、宗教的情操の教育の規定は見当たらない。

3 学習指導要領から

では教育課程を編成するもととなる学習指導要領において、道徳教育との関係から「宗教」はどのように扱われているか。

「中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」では、その116ページに及ぶ解説書の中で4か所のみ「宗教」という言葉が登場する。

1つ目は、道徳教育に関する内容項目の「16 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の中で、内容項目の概要として解説した文章の中に以下のように示されている。『文化』とは、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果を指し、衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含んでいる」

2～4つ目は、道徳教育に関する内容項目の「18 国際理解、国際貢献」の中で、指導の要点として解説した文章の中で以下のように示されている。「なお、宗教が社会で果たしている役割や宗教に関する寛容の態度などに関しては、教育基本法第15条の規定を踏まえた配慮を行うとともに、宗教について理解を深めることが、自ら人間としての生き方について考えを深めることになるという意識を十分考慮して指導に当たることが必要である」

つまり、宗教についてのその役割や寛容な態度がなぜ必要なのかについて理解を深めることが自らの生き方を深めることになると言っている。その上で宗教的な情操を深めることの必要性についてはふれていない。また学習指導要領総則編には、教育基本法第15条⁸を抜粋しているのみである。

以上から分かる通り、義務教育段階において学校教育では宗教的情操というような情操教育については、どの教科・領域で指導するか明確ではなく、私立学校においてのみ建学の精神に則った教義を道徳の代わりに指導している⁹ことが明白になった。さらに、教育

基本法に定められた宗教教育は大切であっても、その中の宗教的情操についてこれまでの日本の教育では指導が徹底されていないことがわかった。

第3章 宗教的情操と日本人 ―西田幾多郎の哲学を基盤にして

1 西田哲学の特徴

信教の自由が保証されている日本において、日本人の心を育てる教育にあって、宗教的情操を育てるということはどういうことなのか。

そもそも、人間の心には宗教的な情操というものがどうして育つのだろうか。これについては、教育学の世界を離れ、哲学の力を借りる必要がある。本研究の特徴と言える点は、こうした教育に関わる課題を解決する場合に、どうしても実践的な指導方法の研究から迫ったり、指導実践の積み重ねの結果から確かめたりすることが多い。しかし、学校現場ではこれこそが研究と考えているが、アカデミックな世界ではこれを学問として高いレベルに位置付けていない。

そこで、宗教的情操の解明に西田幾多郎の哲学を活かすことができなさを検討した。西田幾多郎は日本を代表する哲学者である。筆者が勤務する大学が位置する石川県の地に生まれ、ここで育ち、旧制第四高等学校（現在の国立大学法人金沢大学）で教鞭をとっていたということで、大変に縁のある学者である。

西田哲学の基盤には、宗教的自覚が誰にでも起こるという論理があることを1年間、西田哲学記念館における哲学講座や『善の研究』¹⁰の読書会に参加して発見したところである。では、この宗教的自覚が起こるという点について、道徳教育における児童生徒の内面の育成に置き換えて、情操の教育として生かすことはできないだろうか。

まずは、西田哲学の基盤の1つと言われている「宗教的自覚」について『善の研究』に書かれている道徳や宗教の章から確認していく。

(1) 善の研究

西田の処女作であるこの著書は、彼が旧制の第四高等学校の教員時代に書かれた論文を基にしたものである。章分けは、第一編 純粋経験、第二編 實在、第三編 善、第四編 宗教となっている。西田哲学を理解する場合に必要なとされる基盤となる「純粋経験」や「宗教」、そして「實在」や「善（倫理）」をそれぞれの編で十分読み込む必要がある。ところが目次の順番に沿って読むことは困難を呼ぶことになる。つまり、旧制第四高等学校時代の講義録や徒然に書いてきた論文をまとめて処女作として刊行したものであり、彼の思想の順に並べられているものではない。藤岡作太郎は彼の著作『国文学史講話』（東京開成館1908年）の中でこれを次のように説明した。（善の研究の基本思想について）この書の初めにあたる第一編が「純粋経験」となっているからである。人生と純粋経験が、直接どう関わるのか。これらの関連は、第一編「純粋経験」だけを見てはわかりづらい。西田自身も、「初めて読む人はこれ〔第一編「純粋経験」〕を略する方がよい」と述べている。そして、藤岡は善の研究の基本思想を理解するには、「實在」「善」「純粋経験」「宗教」と読み直すことを薦めている。

この論文は西田哲学の解説ではない。道徳教育における西田哲学の活用である。そこで、とりわけ「純粋経験」および「絶対無」について、宗教的情操の教育に関わる点と考え、

論を進めていく。

① 純粹経験

純粹経験とは、西田が用いる前から西洋哲学においても、英国の理想主義派の哲学者 T・H・グリーンや、米国の W・ジェームズ、仏国の H・ベルクソンなどに見られる。また、東洋哲学においても、こうした思想・哲学が広く語られているのであって、西田が発見したものであるとは言えない。

反省とか、振り返るなど、自らの頭で感じて考えるような思索に入っていると意識する以前の段階が、人にはあるという。この意識する前の段階の経験を直接的な経験（「直接経験」）と呼んでいる。この直接経験は、経験する主体と経験される対象であるところの客体があるとすれば、まだどちらが主体でどちらが客体というような区別をつけるよりも前の段階である。これを主客の対立以前の未分化の状態と呼んでいる。またそれは、未分化されているだけでなく主客が連続的に捉えられる状態¹¹でもあるという。

例えば、わかりやすい身近な例で考えてみる。これぞ神業と呼ばれるようなスーパープレーを魅せて、ファンを魅了する選手がいるとする。このような選手に限らず、試合を中心に運動している時に、夢中になってプレーをする。自分の考えたようなプレーとか練りに練ったプレーというよりも、そのプレーの瞬間に何も考えずに動くことができたという新聞記事やインタビューのコメントを読むことがある。俗に言われる「ゾーンに入った」というものである。

米国の心理学者 M・チクセントミハイによって提唱された心理学概念であるところの「フロー現象」¹²と同じものである。人間は外部からストレスを感じると、脳細胞から自律神経や内分泌において影響を与えて、体の不調を感じることもある。例えば、心拍数に乱れが生じる。そして、落ち着いて思考することができなくなる。ところが、この逆も真であり心拍数のリズムが一定で安定すると、精神が落ち着いてきて思考ができるようになる。

西田は、禅宗に若い頃没頭していた時期があった。座禅を組む毎日が続いた。禅宗の僧侶からは、「一寸」という肩書をもったこともある。ただし浅見は、西田の宗教哲学については、キリスト教、仏教（禅宗、浄土真宗）に対して、等距離であるとする。また、浅見は西田哲学の根底には禅仏教があり、西洋哲学やキリスト教思想との対話によって、彼の哲学が形成されたとする理解を示している。その理由としては、若き日に猛烈な全体研をしたことに加えて、著作において用いられている宗教用語がすべてキリスト教だったことや、聖書に慰められた体験に至るところで綴っているところからもわかるとしている。

② 絶対無

西田の宗教に対する考え方を抑えることで、絶対無¹³の考え方が大いなるものと私との関係性の中で見えてくる言葉ということがわかる。

西田は、神や仏といわれるものと人間との関係を「逆対応」¹⁴という言葉で考えている。「神は絶対の自己否定として、逆対応に自己自身に対し、自己自身の中に絶対的自己否定を含むものなるが故に、自分自身によってあるものであり、絶対の無なるが故に絶対の有であるのである。絶対の無にして有なるが故に、能わざる所なく、知らざる所ない、全智全能である。故に私は仏あって衆生あり、衆生あって仏があるという、創造者の神あって創造物としての世界あり、逆に創造物としての世界あって神があると考えるのである」としている。絶対無として、見ることもできなければ、あそこにいるという指し示すこともできないのが神である。しかし、人間に神はいないかと問えば、そうではないと弱い立場

の者は言うだろう。神はこの世界の中に、どこにもいないのだけれども、どこにでもいる。これは矛盾であるが、西田は「絶対無」である神は、絶対の自己否定をして、この世界にのなかにいると考えたのである。このように、救いを求める人間の側からの働きかけに対して、人間を救おうとするサムシング・グレート(神や仏などの創造者)側からの逆方向の働きが対応してくることになる。つまり、宗教的情操をもつということは、自分自身が弱い状況であると悟れば悟るほど、絶対無の中に位置付く存在であるということになる。

こうしたサムシング・グレートは人として気弱な時、不安な場合にこそ現れるものであり、信仰とも学問ともその深さに関係なく、誰の心にも現れるから宗教と言えるだろう。

(2) 愚禿親鸞

西田は少なからず親鸞について触れている。『歎異抄』について、1910年について真宗大谷大学で講義を行っている。1911年に『善の研究』を刊行し、一方で、論文「愚禿の自覚」¹⁵を発表して、10月から真宗大谷大学では京都大学だけでなく非常勤で哲学概論や倫理学の講義も始めている。

こうした西田自身の生き方を見るにつけ、親鸞をはじめとする真宗の教義に関心を高めていることがわかる。しかしそれが、処女作である『善の研究』を発売する年に重なっているということは、少なくとも西田の頭の中には、宗教と道徳と純粹体験を代表とするキーワードをもって前期の西田哲学として形作られていったのだろうと推察される。

論文「愚禿親鸞」とは、親鸞について尊崇の念を示すため「愚禿」とした。「愚禿」とは、宗教の本質、神髄を示すやや皮肉に満ちた表現であり、頭を丸めるということは己を捨てて新たな仏と言う命に入ることを示しているものである。また、前期西田哲学において、倫理的立場から宗教的立場へと向かっていく宗教的転換の接点と言える時期である。

2 西田哲学と道徳

田中潤一¹⁶は、西田が道徳の問題を自らの哲学の課題として有していたという。しかし、『善の研究』や『藝術と道徳』といった書物で彼が展開した倫理学は、道徳や善を分析することではなく、すべての実在の根底に存在するところの宗教的実在(根源的統一力)の自己実現の一端として道徳の問題を位置付けようとしたとしている。

しかし、人間の行為が意志にのみよる(内在的)なのか、あるいは衝動(このワードは西田哲学において前期の段階で「純粹経験」論の中で強調された点である)のような外的要因による(外在的)なのかは、倫理学の世界ではこれまで議論してきたところである。西田本人は、衝動的というように人間の活動の根底に存在する者として「衝動」を重視している。「衝動」から人間の行為が生じるという基本姿勢は変わっていないが、この「衝動」がどこからやってくるのかについては、西田自身が単に内面的衝動から人間の行為になるとはせず、外的世界から人間の行為が「唆(そそのか)される」ように生じるとしている。しかし、唆された自分自身が道徳的行動をとれるものなのだろうか。相手をおだて薦めて自分のやりたいことをやらせることが唆す意味だと辞典¹⁷では示している。すると、唆す相手がいるわけであり、それが善の行動を自分に対しておだて、薦めてくることになる。いったいこの相手は誰になるのか。つまり、西田は「衝動」が起こって人間は道徳的行動をするようになるのであれば、この衝動を内面に起こさせるような外在がどこかにあると言えよう。

『善の研究』の第五章「知と愛」では、外在的なものとしての神を考えさせる記述があるのでこれを抜粋する。

「以上少しく知と愛との関係を述べた所で、今之を宗教上の事にあてはめて考えて見よう。主観は自力である、客観は他力である。我々が物を知り物を愛すといふのは自力をすて、他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との他にないものとすれば、我々は日々他力信心の上に働いて居るのである、学問も道徳も皆仏陀の光明であり、宗教といふ者は此作用の極致である。学問や道徳は個々の差別的現象の上に此他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全体の上に於て絶対無限の仏陀其者に接するのである。」¹⁸

下線部分は筆者のものである。この下線部分において、自力をすてて他力の信心に入るとしているが、ここが内在的ではなく外在的なものから衝動を受けて、道徳的な行為を人間は行うという論理の説明部分であると捉える。それを西田は一方で外的世界から「唆される」と言う一方で、仏陀の光明を浴びて他力の光明に浴するとしている。

ここで気になるのは、西田自身の宗教との立ち位置である。これについては、次の第3項で述べることとする。

3 西田哲学と宗教的情操

主客一体としての純粹経験を實在の根本として絶対無を基本とした。そこから見える外側の世界について、場所的論理をとなえて、主観と客観の違いを明確にしてきた。

西田は『善の研究』第2編「實在」の中で、人間が實在しているのは純粹経験の瞬間であり、ここを基盤にしなければ何も見えてこないとする。

そこまでの論理展開を本文を抜粋して確認してみることとする。

「我々がまだ思惟の細工を加えない直接の實在とは如何なる者であるか。即ち真に純粹経験の事実といふのは如何なる者であるか。此時にはまだ主客の対立はなく、知情意の分離なく、単に独立自全の純活動あるのみである。」¹⁹

純粹体験の状況では、主客がないのであるから、そこに神や大いなるもの存在を感じることはない。だから当然、内から湧き出る者も外から衝撃を受けるものも区別できないのである。

ところが西田は次に以下のように言う。

「凡ての實在の背後には統一的或者の居ることを認めねばならない」²⁰として神や仏陀、など不可思議力を認めなくてはならないとしている。しかしこの神や仏陀を例に挙げたとしても、彼は仏教徒ではない。菩提寺は浄土真宗である。しかし、学友の鈴木大拙と共に、禪宗にのめり込むこともあった。また学生時代からドイツ語を学び、イギリス理想主義哲学だけでなくドイツ観念哲学も学び、カントの批判哲学の影響を大きく受けている。さらにキリスト教に対して学問的な造形も深い。

西田の学んだ明治時代において、日本での西洋文化は宗教についても盛んであり、西田はいち早く多様な宗教が世界に存しているために、それぞれの人がどんな大いなるもの(サムシング・グレート)を信じていようが、何かだけが正しいゴッドであると限定していない。そこで、西田は倫理的な立場においては、単に内なる叫びであるところのカントの言うような自律が必要と言う内在的なものに終焉することなく、人間の内部にあっても自分自身を規定するところの純粹体験をした絶対無の外側には、場所的理論としてそれを支える基盤となる土台として、宗教的な立場が存在すると理解できる。

西田の言葉を借りれば、「自力から他力へ」²¹ということである。「自ら」という言葉を人はそれぞれどう読むだろうか。「みずから」と読めば、そこには自力によって為すという意味合いが強くなるが、一方で「おのずから」と読めば、そこには自然の流れにしたがって、大いなるものの為すままに受け入れるという意味合いが濃くなる。大切なことは文字にすればどちらも「自ら」である。つまり、場所としては自分の内面なのだが、その中

には単なる自身だけでなく他力が生まれる宗教的な基盤があるという点である。

実際に自分の外側にこうした者が本当に現れてしまうと、それは単なる幽霊や妖怪である。しかし人はみな自分の内面において、この2つの内面を持ち、他力によって自分が衝動を受けて道徳的な行為に達すると西田は解釈したのである。

4 宗教的情操と日本人の生き方

純粹経験というものを人間は誰もが「瞬間体験」²²としてするならば、その純粹体験が宗教的情操につながるという西田の考え方を借りれば、人はみな宗教的情操をもつということになる。しかし、そこに自分はこれまでの純粹体験をしたことがあるという振り返りを行うことができれば、本人が自分の心の中には、純粹経験から感じ取られた宗教的情操というものが芽生えていると考えることができる。だから、この自分には宗教的情操があるという自己評価を下すことができるようにするために、教育を受ける、もしくは説教を受ける、もしくはこの経験を自らくりかえすことができるように積極的に関わっていくことで、人としての生き方に宗教的情操が関わるのであろう。

それではなぜ、説教や宗教的体験と比較して、教育だけが日本においては強調されるのだろうか。寺社に行って僧侶や宮司から仏や神といったいわゆるゴッド (God) の話を定期的に聞くことができる者は信者である。キリスト教の礼拝や仏教の説法会のように、信者であればなかば強制的に学びの場が開かれている。一方、宗教的な体験ができるように説法を唱えたり、讃美歌を歌ったり、聖書があつたり、お香を炊いて神秘的な気持ちになったり、曼荼羅図を見てめまい感を覚えたり座禅を組んで俗世間とは異なる世界を体験したりすることができる。しかし日本では、ある意味、観光地化された神社仏閣での宗教的な体験である。神社仏閣等宗教的な場所では、信者を増やすことにつながるのであればいつでも誰でも好意的に向かえるだろう。つまり、ウインウインの関係から、こうした宗教的体験を日本人がしているのが、2019年現在の日本人の様子である。

しかし、学校教育の段階で未成年者に対して、心が柔軟でどのようなことに対してもクリティカルな目をもつことが十分でない子どもたちに対しては、教育という方法によって、自分の中に宗教的な情操が存在すると自覚することができるようになる。

宗教的情操の教育をこれから実施しますとは、学校教育において明確に宣言できないことはこれまでの論述の中でも法的な解釈の違いからも述べてきた。しかし、国教が定まっておらず、信教の自由が保証されている国において、誰もが最初に宗教的情操の教育を経験するのは、学校である。学校において修学旅行で寺社を訪問して、座禅体験を小中学生に実施 (会津・日新館²³において実際に体験できる) している学校は多くある。うとうと居眠りをするような生徒は、すかさず僧侶の喝が入る。また、長野市の善光寺²⁴では仏さまの胎内巡りを僧侶の話聞いた後に、訪問した小中学生が真つ暗な闇の中に一縷の救いを求める体験をしている。こうして宗教的情操の教育は日本においてこれまで目立つことがないが着実にどの子もみな体験してきているのである。つまり、学校教育における宗教的情操の教育は確実に進められているが、指導している教員自身が、こうした哲学的な知識や経験がないために、自分自身が児童生徒に対して宗教的情操を培っているという意識が薄い。教師から本時の学習の目的は宗教的な情操を豊かにすることだと話されたり、こうした指導案を渡されたりした者はいない。

ここでこれからの日本人と宗教的情操の教育における可能性が見えてきた。つまり、信教の自由で保障されている日本人が自らの心の中の宗教的情操を豊かにして、自らの生き方をよりよく生きようとするような倫理的な思いに至るには、宗教的情操の教育を子どもたちに自ら意識して気づかせることである。いま、宗教的情操を高めるための授業を受

けているとか、いま実施している学校行事は宗教的情操を高めるためのものであり、特定の宗教を信仰するための教育活動ではないと確認させることである。

これにより、宗教的情操を高めた際の高揚感やその方法などを理解する。これにより、児童生徒は成長して成人になったとき、自分の信教の自由に則り、自分自身の選択で宗教にかかわる組織に関わったり、宗教的体験ができる活動に参加したりする。絵画を見たり、音楽を聞いたり、修行をしたり、瞑想体験をしたりすることができる。

海外においてイスラム教や仏教、キリスト教を国教としている国の国民は、自ら進んで拝殿したり、神聖な気持ちで自らの思いを捧げたり悔い改めたりするときには積極的に宗教的な情操を高めている。これにより、よりよい生き方を選択してめざす日本人が増えていくのではないだろうか。

第4章 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

西田哲学における純粹体験から始まる我々と神との関係性を明らかにすることができた。これまで特設道徳の時代から課題であった宗教的情操を教育することは、法律上可能かどうか不透明だった部分があった。しかし、宗教教育の視点から迫らなくても、哲学的な次元を高めていくことで、哲学の一部である倫理学と宗教との関連性から、道徳と宗教的情操がつながることが、西田哲学の絶対無や場所的理論などの基層をもとにはっきりとさせることができた。西田哲学が宗教的情操の教育の可能性を高めた理由は、彼がキリスト教とも禅宗や浄土真宗とも等距離に自らを置き、研究の対象としてきたことにある。多様な宗教にあって、どのようなサムシング・グレートであっても、その大いなるものの対象との間では、自らの位置を絶対無としてそこから場の理論を用いて、主客の関係性が見えてくる。また、大いなるものと一体化する際に、物と自分の意識変化や知と愛の関係性となっていくことも、いわゆる神に対する宗教的情操の根本の部分の部分を解明することに役立った。

2 今後の課題

道徳教育における昭和 33 年からの課題の 1 つに、宗教的情操の教育をいかにするかがある。2018 年から道徳が教科化され、その内容項目が未履修では認められない時代である。それでは各学校において、「感動・畏敬の念」の徳目についてどのような指導を行っているのだろうか。各市区町村の道徳科の研究発表会でこの内容項目を公開授業で指導したり、直接この項目を研究主題にしたりしている学校は皆無である。扱いが難しい。宗教的情操の教育は、宗教の視点からではなく、倫理との連関の中で高次の道徳として指導できることが可能である。恐れずに堂々と、学校現場の教師が指導できるように学校現場の校内研究の際に指導訪問して、このことを広く伝える必要がある。また、各都道府県の教育委員会には、これからの時代に自らの存在を見つめ直し、よりよく生きるために哲学をベースにした道徳科の授業の大切さをあらためて訴えていくことが必要であろう。最終的には、宗教的情操の教育をフロー体験のようなわかりやすい具体例をもって身近な体験的感覚として道徳科の指導方法に組み入れていくことも検討する必要があるだろう。

注

- 1 東風安生『寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究』富山房インターナショナル、2018年
- 2 貝塚茂樹『文献資料集成 日本道徳教育論争史 第Ⅲ期 戦後道徳教育の停滞と再生 第12巻 「特設道徳」論争』、日本図書センター、2015年1月
- 3 貝塚茂樹「戦後教育において『宗教』はどのように論じられてきたかー宗教教育の歴史と今後の課題ー」、研究報告書 No. 78 押谷由夫監修『学校における「宗教にかかわる教育」の研究1ー日本と世界の「宗教にかかわる教育」の現状』、公益財団法人中央教育研究所、2012年10月
- 4 新村出編『広辞苑』岩波書店、2017年
- 5 押谷由夫「本研究の意図と願い」、研究報告書 No. 78 押谷由夫監修『学校における「宗教にかかわる教育」の研究1ー日本と世界の「宗教にかかわる教育」の現状』、公益財団法人中央教育研究所、2012年10月
- 6 東風安生『キャリア形成と道徳教育ー早稲田実業学校の道徳教育からー』日本学習図書株式会社、2018年
- 7 村上和雄・矢作直樹『神（サムシング・グレート）と見えない世界』祥伝社新書、2013年
- 8 第15条（宗教教育）宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。2 国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。『解説 教育六法』三省堂、2018年
- 9 東風安生「私立小学校における道徳教育の現状ー東京都私立小学校に対する調査結果から見えてくるもの」日本道徳教育学会神奈川支部『研究紀要 道標第1号』2014年3月。
- 10 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、2003年
- 11 小坂国継『西田哲学の基層ー宗教的自覚の論理』岩波現代文庫、2011年
- 12 M・チクセントミハイ著、今村浩明訳、『フロー体験：喜びの現象学』世界思想社、1999年
- 13 中岡成文『私と出会うための西田幾多郎』出窓社、1999年。
- 14 浅見洋監修、櫻井歆著『西田幾多郎 寸心の思想』金沢市国際文化課、2005年
- 15 西田幾多郎『西田幾多郎随筆集』岩波文庫、1996年
- 16 田中潤一「後期西田哲学における人間的行為と道徳の一考察」日本倫理学会『倫理学研究』第42巻、P112、2012年
- 17 新村出編『広辞苑』岩波書店、2017年
- 18 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫 pp. 245-246、2003年
- 19 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫 pp. 49、2003年
- 20 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫 pp. 55、2003年
- 21 浅見洋「西田幾多郎の親鸞理解ー「知と愛」についてー」2019年度西田幾多郎哲学講座・講演資料、2019年4月27日
- 22 真仁田昭『やり抜く子ども』金子書房、1976年
瞬間体験とは、子どもが作業に集中して「あつという間におわっちゃった」というつぶやきから拾った臨床心理学的な研究で用いられた言葉。
- 23 <https://nisshinkan.jp/> 會津藩校 日新館（2019年4月28日閲覧）
- 24 <https://www.zenkoji.jp/> 信州善行寺（2019年4月28日閲覧）